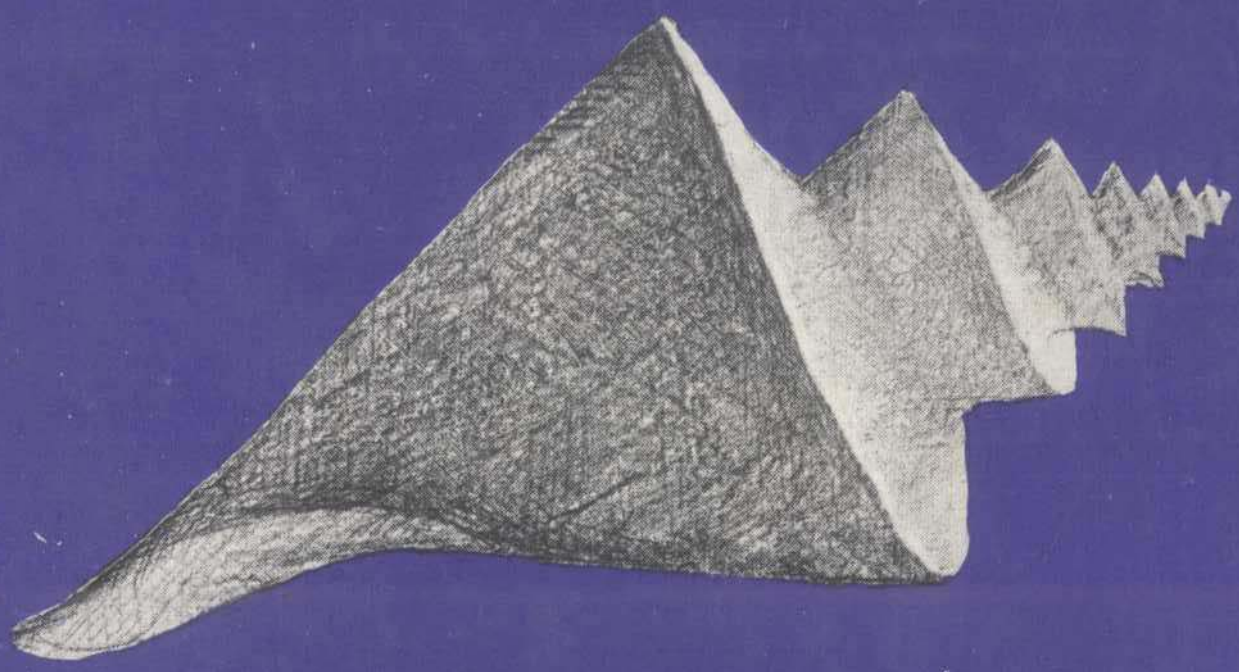
海の瞳

原口統三を求めて

清岡卓行



文春文

文春文庫

定価はカバーに表示してあります

海の瞳 原口統三を求めて　154－1

1975年8月25日　第1刷

著者　清岡卓行

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3　〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

〈春文庫

海の瞳

原口統三を求めて

清岡卓行

文藝春秋

海の瞳

〈原口統三を求めて〉

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

1

「もう、そろそろ、望小山が、見えてくるんじゃないかしら？」

彼はうとうとしながら、原口統三のいつものように遠慮がちな、まるで「小石に躓きながら」語りかけるような、低いその声を聞いた。

先程から彼は、座席の少しは柔かいレザーの背が、窓側の固い木の壁に直角にあたって作りだしている窮屈な隅に、蓬髪の頭をぎごちなくあずけたままであった。

眼を開いていると、なんとなく睡たいように感じるが、眼を閉じていると、頭の中のどこかに、なにかの不安な思いが生れ、それがしだいに冴えてくる。意識の状態のそんな矛盾を持てあましながらも、彼は、積った旅行の疲れのせいか、ようやく昼の眠りに落ちようとしていたところであった。

そのときなぜ、「小石に躓きながら散歩する」という原口統三の口癖を、彼は映像のように思いだしたのだろう？

車窓の外は、四月はじめの南満洲のひろびろとした平野である。緑がおおいはじめている大地。

よく乾いた風。眼にしみる青さの空。走る列車が地上に落としている影も、どことなく澄んでいる。午後の明るい太陽の光は、むしろ物憂い匂がしそうだ。

少しは粗雑な感じもする、その南満洲の大味なのどかさは、二人が数日前に離れてきたばかりの、日本内地の空襲におびえた風景とは、ずいぶん違っている。

「戦争をしている世の中とは、まるで思えないね」

と彼は、窓ガラスごしに外の景色を眺めながら答えた。そして、少ししか上げていなかった窓枠を、大きく引き上げ、外の空気をいっぱいに入れた。ちょうど良い風向きらしく、蒸気機関車が吐く石炭くさい煙が、そこへまったく流れてきていなかったからだ。あの煙の中の微かな黒い粒が、眼の中にはいるとやりきれない。

朝、奉天を出て大連へ向った列車は、さきほど大石橋を過ぎたので、もうすぐ熊岳城に着くはずであった。その少し前に、平野の中で小さく屹立した岩山である望小山が、その風変りな姿をあらわすことになる。

乗客のまばらな、がらんとした三等車。それでも、斜めに射し込んでいる日光に、うっすらと漂っている埃。二人はたまたま、進行方向に対して左側の座席に陣取り、向い合って坐っている。南に面している彼の方が、先に、その傍の開け放たれた窓から、あの奇妙に懐かしい形の突出した丘を見つけることになるのだ。

二人はすごく空腹である。朝鮮を北上して、そのまま新京に向う列車を奉天で降りたとき、乗

り換えで生じた一時間ならずの間に、朝の駅前の町を散歩したが、店がろくに開いてなくて、とある小さな中華料理店で、ありあわせの煎餅を慌しく食べただけである。東京の生活で、飢えには馴れっこになっていたが、旅行の最中の飢えは、ほとんど座席にじっとしていなければならないだけに、かえってどうにも紛らわしにくい。煙草もとっくに尽きてしまっている。

彼は、青空の遠くに流れる、引っぱってちぎれたような雲の形に、ふと、とろけたお餅を連想する。焼くか煮るかしたお餅を、歯で噛んで引きちぎろうとするときの、湯気の立った熱い中身みたいだな、と不意に思うのだ。それは、それほど突飛な想像でもないだろう。飢えほど、奇妙な空想をさせるものはないのである。前の日には、朝鮮の夕空に浮かぶ赤い太陽に、イクラの巨大な一粒を思い描いたのであった。

熊岳城という地名にも、彼はそこの名物となっている、熊岳河に湧く温泉を利用した野天の砂風呂ではなく、小学生のとき家族と旅行して、その駅のプラットフォームで買った、赤っぽい皮の可憐な梨を思いだしている。その土産ものの果実は、その土地にある満鉄の農事試験場が作ったものだそうで、さっぱりとした甘い味であった。

望小山が、しだいにその岩山である特異な形をはっきりさせてきた。

まるで、巨大な蛤が、大地の中から、二本の癒着した水管を、にょっきり空中に突き出した

ようだな、と彼はふと思った。そして、思いついた通りのことを、口にしてしまった。

すると、原口統三は、窓から首をつきだして、草木とはほとんど無縁にのっぺらぼうな、その突出した高い丘をしげしげと眺めていたが、座席に坐り直すと、どうも賛成できかねるというような調子でこう言った。

「蛤の水管か。それにしちゃ、根元のへんが太すぎるでしょう？　それに、あの山の、岩を沢山積んで重ねたような、ザラザラした感じだって、軟体動物のぬるぬるの感じとは、ぜんぜん違うでしょう？」

「そうだね、昔は蛤のことなんか、あの山見ても、想像もしなかったんだけれどね――。あのザラザラしたような感じの岩は、礫岩なんだって」

「礫岩？　ははは、よっぽど、こちらがひもじいっていうわけだなあ」

原口統三の毒のない笑い声には、しかし、空腹による彼の途方もない連想を少したしなめるような響きがあった。いつも、彼の方が飢えに弱く、原口統三の方はときどき、〈武士は食はねど高楊子〉という言葉を好んで呟くほど、我慢づよいところがあった。

彼は自分の想像が少し恥ずかしくなったのか、礫岩という単語が飛びだしたのをきっかけにして、別なところに望小山の話を持って行き、なけなしの知識をひけらかしはじめていた。それは、満鉄の調査部に勤めて、満洲のあちらこちらを歩き廻っている地質学者である、彼の義理の兄から以前聞きかじっていたものであった。

それによると、望小山の近くにある似たような感じの、しかしずっと小さい五箇ほどの丘も、すべて礫岩であり、それらは地中で、望小山と根を同じくしている。

つまり、そこらあたりは、話の規模をぐっと大きくするなら、中生代の白堊紀のおわり頃、広い湖の底であったのではないかと思われる。恐竜どもが衰亡しつつあった、およそ七千万年ぐらい前のことである。その湖底がいつのまにか盛り上って、望小山をはじめとするいくつかの礫岩の突出部が、今日の風に吹きさらされているのだ。

望小山の遙か東の方で、切り立つように連なって聳えている千山の峰々の岩は、しかし、花崗岩である。千山と望小山のあいだには、眼に見えない断層が横たわっている。

千山と言えば、その一番高い峰は海抜七〇〇メートルほどで、松そのほかの樹木も多く、道教の観や仏教の寺が沢山あることで有名であるが、馬賊がときどき逃げ込んで姿をくらますということでも知られている。この山についても地質学的に述べるなら、その峨々たる岩は、中生代のジュラ紀から白堊紀へ移る頃、つまり、およそ一億三千万年ぐらい前の花崗岩であると推定される。それもやはり、いつのまにか盛り上ってきて、今日、道士や馬賊といった風変りな人間たちに親しまれているのだ。

彼は、僅か数年の後輩に対しても、まるで先生が生徒になにかを教えるような調子で、話しかけたりする癖があった。このときも、そうであった。

望小山は大きく眼の前に浮かんできていた。原口統三は、ときどきそちらの方に眼をやりなが

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ら、彼の話をいやな顔もせず、面白そうに聞いていた。七千万年ぐらい前とか、ジュラ紀とかいった、気の遠くなるような言葉が、思いがけなくいろいろ出てきて、そのことが、いくらか気に入っているようであった。

ところで、二人の心にとって、望小山という存在は、以前から、忘れることのできない一つの遠い痛みのようなものであった。二人は、その山にまつわる悲しい伝説を、小学校のときに副読本などでおそわっていたし、その後、旅行の途中で列車から、その山をときたま感慨をこめて眺めていた。それは、関東州や満洲で幼少年時代を送った日本人の子弟にとって、ほぼ共通する経験であっただろう。

二人は、母と息子にかかわるそのさびしいレジャンドに、時代や風土や民族を越えて、なんとなく身につまされるような、他人事(ひとごと)ではないかもしれない哀れさを感じていたのであった。

それは、簡単に言うと、こんな物語であった。

唐の時代であったか、明(みん)の時代であったか、とにかくとても遠い昔、熊岳城の里に、ある寡婦が孝行な息子と二人で、つつましく暮していた。

息子はやがて、官吏となって立身することを夢みるようになり、母もそれを励ましていた。ある年の高粱が生い繁る頃、ちょうどよい道連れがあったので、息子は、熊岳城からわりに近い遼東湾のある海岸で、帆船に乗り、山東の方へ向った。

ところが、その帆船は運わるく、渤海のまんなかで暴風雨に出あった。そのため、その帆船はあえなく沈没し、乗っていたひとびとは皆溺死した。

それとは露知らず、母は、息子の帰るのを楽しみにして待っていた。試験にうまく合格して、官吏に登用されることになったか、それとも、失敗して嘆いているか。いずれにせよ、もうそろそろ息子が帰ってくる頃だと思い、母は待遠しくて家の中にじっとしていることができなかった。

彼女は、毎日のように、閑をみつけては、険しく聳える小高い山にやっこらと登って、遙かに遠い遼東湾の海の方を、一心に眺めていた。

しかし、その海に、戻ってくる帆船の姿はときどき見かけても、いとしい息子はいつまでも家に帰ってこなかった。また、熊岳城の方へ旅をしてくる他人で、息子が托した手紙や伝言を持ってきてくれるひともいなかった。

なにか不吉なことでもあったのではないか。母はそう思って、その険しく小高い山の上に立ち、とうとう、海の方に向って、息子の名前を狂おしく叫んだりするようになった。

月日は空しくめぐって、また、高粱が生い繁り、その上を爽やかな風が吹き抜けて行く時節となっていた。

ある日、心も体も衰えはてた母は、いつもの小高い山の上で、息子の名前を呼びつづけながら、死に絶えた。嘆きのあまり、彼女は冷たい石になっていた。

「日本語のときは、望兒山より望小山の方が言いやすいようだけれど、中国語のときは、望小山より望兒山の方がひびきがいいんじゃないかしら？」

中国語がいくらかしゃべれる原口統三は、その伝説の岩山に二つの名前があることを、中国語のまるで不得意な彼に、思いださせた。それらの名前は、断わるまでもなく、どちらも、子供を待ち望む山という意味であった。彼はふと、原口統三の両親を思い描いた。実際に会ったことはなかったが、その息子の話を通じて、「大陸浪人」である男性的な父親と、優しい諦めのような微笑みをたたえた「典型的に封建時代の婦人」である母親を、ときどき想像していたのであった。

原口統三は末っ子で、兄が二人、姉が二人ということであった。本籍は鹿児島県であるが、生れたのは朝鮮の京城、そして、育ったのは満洲の各地。中学三年生になるとき奉天の中学校から大連の中学校に転入したが、家族はそれ以後、大連で暮しているということであった。

「どちらにしても、いい名前だなあ。人間の悲しみが通っているものね。大連の老虎灘とか、黒石礁とかいう海岸の名前も、いいけれど、あれは、年をとった虎のような岩があったり、黒っぽい岩礁があったりするところからきた、外面的なものだからね。そこへ行くと、望小山にしても

望見山にしても、内面的だよ」

彼はそう答えて、その伝説の山、「巨大な蛤の二本の癒着した水管」の、高い方の管のてっぺんにある、小さな仏塔を指さして、附け加えた。

「だけど、あの塔は、伝説とは関係ないんだってね」

原口統三は、十八歳であったが、なんとなく老けた感じがした。子供のとき、親類のひとから、「この子は親に似ないで、おじいさんに似ている」と言われたことを、自分で面白そうにしゃべっていたことがあったが、その話には真実味があった。やや長身の骨太で、色は浅黒く、動作は柔軟でなく、話し方はどことなくまどろこしかった。顔は卵の形で、眉は真横に太かったが、やや上下の顎が長く、眼鏡の奥の二重瞼の睫毛の長い眼だけが、ときに睡そうではあったが、若々しく純真に澄んでいるように見えた。

それは、非常な秀才である原口統三の風貌としては、似合わしくなかったかもしれない。しかし、それは、自分の偽りに対してきびしく、他人の苦しみに対して優しい心にとっては、ふさわしいものであったかもしれない。

原口統三は、彼の言葉につられて、望小山のてっぺんにある仏塔と、そのへんを飛んで行く数羽の鳥を眺めていたが、なにかが頭にひらめいたように、こう言った。

「もしかしたら、伝説にあたる事実があったのではなくて、ひとびとがあの奇妙な山を長いあいだ眺めて暮すうちに、そんな話を想像するようになったのかもしれないなあ」

「そう言えば、あの山の傾斜は急だね。場所によっては、九〇度に近いんじゃないかな。年をとった女のひとには、登るのは無理かもしれないね。それに、以前から気になっていたんだけれど、あの山のてっぺんから、遼東湾が果してよく見えるだろうかっていうことなんだ。ここから西の方の海までは、わりに短い平野のはずだけれど」

「それもそうだけれど、たとえ、なんらかの具体的な話があり、実際にあの山に登ってみれば、四方八方がよく見えるとしても、そうしたこととは別個にね、平原に突出している丘の形というものには、それ自体に、遠くを眺める人間の悲しみのようなものが、象徴されているでしょう？」

「そういう意味か」

「その形が、さっきの話じゃないけれど、中生代の白堊紀の湖の底で、すでに用意されていたとなると、ぼくはへんな気がしてくるんだなあ」

二人の会話は、よくこんなふうに、浮世ばなれしてくるのであった。

彼は二十二歳で、東京大学のフランス文学科の学生である。原口統三は、彼にとって、大連第一中学校と東京の第一高等学校を通じての後輩で、やがて、同じ大学の同じ学科の後輩にもなるはずである。このように、二つの遠く離れた都会にまたがって、まったく同じ勉学のコースを学ぶということは、まことに珍しい縁であると言わなければならない。

もっとも、見かけの上では、栄養不良で痩せているということを除けば、二人はほとんど似て

いない。先輩である彼の方は、比較的小柄で、色が青白く、眼が少しつり、眼鏡をかけていない。とても神経質で、しゃべり方も早口である。笑い方だけは、世の中を揶揄(やゆ)しているような態度をそれとなく見せたいためか、へんに陽気だ。

彼の大連の家庭では、満鉄を定年退職して、今は手頃な請負いの工事をしている、土木技師の父と、八人の子供を育てた母と、二人の姉などが、彼の帰省を待っている。彼は下から二番目の子供である。

彼が心の中で一番怖れているのは、いつやってくるかわからない召集である。大学では休学の手続きをしてきたので、大連の実家でその赤紙がやってくるのを、地獄の使者を迎えるような気持で、じっと待つことになるだろう。

原口統三の方は、徴兵年齢にまだ間があるので、いずれは東京の高校に舞い戻らなければならないが、春休みを自分勝手に数週間延長することになるだろう。

あと四箇月と少しすれば、このすさまじい大戦争が終了するということを、二人はもちろん夢にも知らない。日本内地で、空襲による惨害を目撃したり、物資の極度の欠乏を知ったりして、そろそろ自分たちも戦場にかりだされて死ぬことになるかもしれない、その前にせめてもう一度、懐かしい大連の空気を吸ってみたい、と思っただけである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com